

ついに始動！ 札幌をぐるりと周回する 「さっぽろラウンドウォーク」

2017年から始まった「フットパス王国北海道」は今年で最後となります。道内のウォーカーや関係者の皆さんからも「見てるよ！」と声をかけられ、とても励みになりました。ありがとうございました。

4年経った現在、新型コロナウイルスの影響でなかなか遠くへ歩きに行くのも憚られる時期ですが、「歩く活動」への注目度の高さを実感しています。コロナ禍となり、それ以前に比べ私たちが行っているフットパスイベントへの申し込みが4～5倍になっています。第14回でも触れましたが、世界や日本で不安定な状況に入るとその影響で歩くなど、野外での活動の参加率が高まります。これは今回の新型コロナ禍で確信に変わりました。人々の心が疲れた時期に「歩く」という野外アクティビティに「癒し」のようなものを本能的に求めるのではないのでしょうか？今後、こういった研究が進むことに期待します。

初回のお話は札幌市内をぐるりと周回する「さっぽろ周回ウォークウェイ」でしたので、最終回も札幌のフットパスに話をつなげて幕を引きたいと思います。第10回でも少し触れましたが、エコ・ネットワークや北海道大学、札幌市、観光協会などの関係者が集い「さっぽろラウンドウォーク (SRW)」と正式名称も決定し、いよいよオープンに向けて邁進しています。設置や調査、管理などを行うためにNPO法人も立ち上がりました。この最終号を執筆している現在も個票調査が鋭意進行中です。今後もさまざまな影響があるでしょうが、来年には公表できればと思い、活動しております。NPOのホームページもオープンし、憲章なども掲載しております (<https://www.sapporo-rw.com/>)。

この個票調査ではルートの最終決定はもちろんですが、コースサインや道標をどういった場所にどの角度でどんな種類のものを設置するか？その管理者は誰で、誰がどのような相談に行くのか？その他の素材や特記事項なども併せて調べていき、どの機関からさまざまな内容のものを求められてもすぐに対応できるようにしなければなりません。

これがなかなか大変で進行を担っているNPOのコアメンバーで講習も受けました。人数もやはりある程度が必要になってきます。実はこの調査にはボラン



小川 浩一郎 (おがわ こういちろう)
 (株)ジオ (THE-O) 代表取締役

1980年札幌生まれ。2001年エコ・ネットワーク代表代行、13年北海道科学大学客員准教授。札幌市南区常盤で育つ。『フットパス』をキーワードに市内、道内、国内で普及活動、ウォークイベントを実施し、ワールドウォーカーとして世界の「フットパス」を歩いている。「歩く」ことを通じて自然あふれる都市・札幌を観光客へ伝えるべく奮闘中。著書に「北海道フットパスガイド①」「北海道フットパスガイド②」。





ティアも募集しています。「調査ボランティア」という名目で一般の方やこういった分野に知識のある方、行政機関の方々など広く募っていますので、興味のある方や歩く文化創出にご協力いただける方はご参加いただくと幸いです。もっと言えばSRWに賛同していただける個人、企業の方がいらっしゃいましたら、是非会員になって応援していただくとありがたいと思っています。ボランティアや会員登録はホームページで簡単に行えます。

NPOやSRWの単純な宣伝だけでこの連載を終わるのは私らしくないのでSRW構想前から考えていたことや同時進行していくとおもしろいことなどをお話します。初回でもお話しした通り、エコ・ネットワークや私は四半世紀前から札幌市内のロングパス（長距離フットパス）化を構想していました。世界、日本各地の道を歩いて感じたいところやその地域に合った新しいいわば「札幌スタイル」というものを取り入れるとさらに輝きが増すと予想されることがあります。これが今後、他のルートとの差別化や活動の継続性につながっていくと考えています。

都市部ならではの企業や店舗と協力する！

ロング（フット）パスやロングトレイルなどは主に山間部や自然の中にあるものが圧倒的多数です。一部、大きな都市に通っているものもありますが、その都市の中の登山道や森林内の遊歩道が多くなっています。しかしSRWの半分は北側や東側の平野部なので住宅地の近くを通ることも少なくありません。そうするとルート近くに飲食店やコンビニ、スーパーなどが多数点在しています。例えばこういった企業や店舗と協力するという事です。すぐに出来そうなのは飲食店やコンビニ等ではトイレを貸してもらったり、マップを販売してもらうということです。飲食店や店舗としても「食事食べてもらえる」「商品を買ってもらえる」という相乗効果もあります。実際に私たちがいろいろなところを歩きにいった、飲食店や店舗をお借りした時には同行者が必ず何かしらを購入することがほとんどです。そこは北海道企業や地元の店舗に依頼するのは言うまでもありません。英国や南幌町などでは取り入れています。協力企業（団体、店舗）には「フットパス協力店」といったステッカーを貼ってもらって

います。ゆくゆくは協力店でウォーカーサービスみたいな形になればおもしろいですよね。実際にSRWの活動には札幌駅近くのTentoTen 04 Sapporo Stationが仲間に加わっていて、宿泊場所や集まりの場、レストランなどとして利用されています。

市民を巻き込む！

「市民を巻き込む」。これは歩くことに関わらず、どの分野でも目標に掲げられるポイントです。ですがなかなか、特に都市部の住宅密集地などではかなり困難な課題かもしれません。しかし九州のフットパス仲間はこの点を特に得意としています。彼らのお膝元である熊本県のみならず、九州全域、四国や中国地方でもそのスタイルが取り入れられているのです。

地域には隠れた歴史や文化、食、そして在野のままでは惜しい人材など、さまざまな魅力が隠れています。そういった事柄や人を最大限に活かしつつ、SRWを利用し、知ってもらう、体感してもらう、と言うのはSRWをより輝かせるものとなるでしょうし、まさにフットパススタイルです。その可能性を秘めた地域がいくつもあり、札幌では北区の百合が原地区で藍染とフットパスなどを活かしたイベントも行ってきて、人気を博しています。

誌面に限りがあるため特に強く思い描いていたことをお話ししましたが、他にもいくつも“札幌を歩く長距離ルート”には可能性と言う名の原石が埋まっています。初回に形容した「札幌は宝石をつなぎ合わせたネックレス」は今後さらに輝きを増し、数を増やしていくことを確信していますし、そのような活動を続けていきたいと思えます。皆さんとどこかのフットパスでお会いし、ウォークトークをできるのを楽しみにして筆を置きます。皆さんGood Path！

